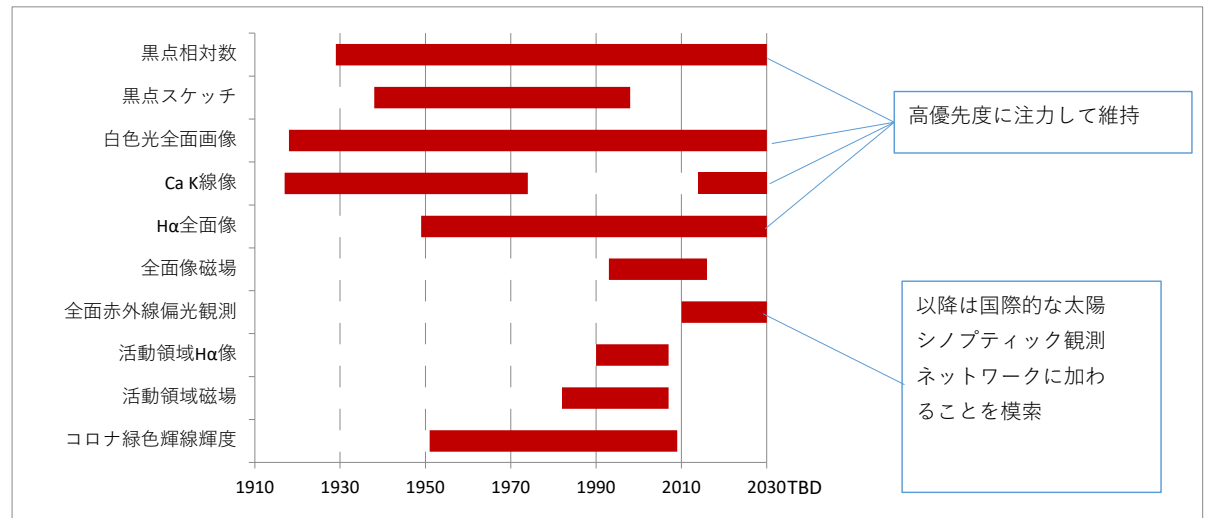


#

記入欄

1	計画名称	三鷹太陽地上観測
2	代表者名	花岡庸一郎/勝川行雄
3	代表者所属	太陽観測科学プロジェクト
4	関連する主な研究者コミュニティ名（あれば）	太陽研究者連絡会
5	現在の計画のステータス	運用段階
6	第5期中期計画期間中(2028-2033年度)の予想されるステータス	既存装置で2026年度 or 2027年度まで運用を継続し太陽極大期を十分にカバーする。その後、光球撮像(白色光・黒点相対数)、彩層撮像(Ca K線、H α 線)の中で高優先度の観測に注力して継続。磁場観測については太陽シノプティック観測の国際ネットワークへ発展的合意によって継続を図る。
7	計画のScience Goal (計画の核心をなす学術的問い)	太陽をひな形とした恒星磁気活動の解明
8	計画のScientific objectives (計画の研究目的)	太陽をひな形とした恒星磁気活動を解明するために、フレア活動に代表される短期的現象を彩層撮像と磁場観測で捉えるとともに、10年から100年以上にわたる長期的な太陽活動の変遷を彩層画像や黒点相対数を観測し記録することで、恒星磁気活動の解明に貢献する。
9	計画が実施するScience investigations (何をどこまで明らかにしようとするか)	太陽の光球・彩層とそこで起こる活動現象を、輝度・速度場・磁場の太陽全面観測によりとらえ、その観測データを国立天文台及び海外データベースから公開することで、国内国外の研究者コミュニティに提供する。
10	計画の実施期間（既存の計画の場合は過去の期間も含む）	1917年以降のデータを保持しており、NAOJ取得データのアーカイブと公開は継続する。既存装置による運用を2026年度 or 2027年度まで継続し、その後三鷹で維持すべきものと国際ネットワーク観測で行うものを区別して、運用を継続する。
11	計画全体の予算規模（総額、もしくは年度毎の額）	約1400万円/年（非常勤職員人件費, 消耗品, 維持費）
12	上記の中で期待する国立天文台の資金（総額、もしくは年度毎の額）	上記に同じ
13	国立天文台に期待する役割	装置とデータベースを三鷹で維持、太陽活動の状況について社会へ発信
14	資金調達方針 (5種類から数字で選択)	2, 5 (未定)
	1. 既存の大規模学術フロンティア促進事業費, 2. 運営費交付金 (既存計画, 新規計画の検討活動・基礎的開発を含む), 3. 新規 大規模学術フロンティア促進事業への提案, 4. 国立天文台以外の実施機関(たとえば大学や JAXA 宇宙研)予算, 5. 外部資金あるいは競争的資金	
15	実施期間にわたる計画の簡単な線表 (画像を添付)	(次頁)



既に終了した観測もあるが、意義のある観測は現在も継続中である。このような観測は、本来国際ネットワークで24時間行うことが望ましく、そのような計画に発展的に合同していく方途を探っている。